

◆関連会議

平成29年度全国青年・女性漁業者交流大会

水産海洋技術センター 米丸 浩平

開催日：平成30年3月1日～3月2日

場所：グランドアーク半蔵門（東京都）

内 容：

3月1日は5つの分科会ごとに各7～10グループが活動成果を発表した。なお、本出張は地域活性化部門（第4分科会）から発表する与那原・西原町漁協女性部の発表補佐が主な目的だったため、第4分科会の内容を中心に報告する。

3月2日は各分科会から農林水産大臣賞を受賞したグループの発表と総合討論、表彰式等が行われ、当県では、恩納村漁協青年部が水産庁長官賞、与那原・西原町漁協女性部が全国共済水産業協同組合連合会会長賞を受賞した。

1 日 目：

第4分科会は、発表9グループ中7グループが女性と例年通り女性中心の発表となった。

東日本大震災被災県からは地元中学生へのカキ養殖体験実習（岩手）と、ホヤ養殖の再興とPR活動の取り組み（宮城）が発表され、カキ養殖では、一養殖業者から始めた取り組みが女性部全体の取り組みに広がり、被災年もわずかに残ったカキをかき集め、20年以上途切れることなく中学生への体験学習メニューを実施し、これまで3名がカキ養殖に就業したとのこと。ホヤ養殖では、被災後の環境変化により、これまで培ってきた天然採苗の経験と勘が当たらなくなったため、東北大学と連携し科学的調査を始めたほか、生産量の大部分を輸出していた韓国の禁輸を受け、県内外で販促を行い、ホヤを知る人も知らない人も新鮮なホヤは美味しいと評価されたという内容で、被災前は同じ湾内でも集落が違えば交流は無かったが、被災後は集落間で交流が生まれ、「湾 for all, All for 湾」で取り組んでいくと締めくくった。

女性グループの取り組みは総じて、地域

振興のため、漁協や行政から補助を得て加工場や直売店を整備し、地域特産品の販売や魚食普及活動に取り組むという内容で、地域の人のための活動を柱にしつつ、観光メニューや観光ルートへの参入など新たな挑戦を行っているものがほとんどだった。

その他、水産会社（鹿児島）の発表もあり、漁業研修制度等を上手く活用して会社の若返りに成功し、クラウドファンディングやダイビング、クルージングなど獲るだけではない海の多面的な利用に取り組んでいるという内容だった。また、青年グループ（長崎）は、用いるデータやその考察、発表姿勢が非常に独特で印象に残る発表だったが、様々な資料のデータから魚価の低迷、魚離れの原因を探り、結果、釣って捌いて食べるを一度に経験させるイベントを実施しているという内容で、観光客の多い当県でも、体験させて食べさせるという取り組みは参考にしたいと思った。（裏面に続く）

当県女性部は、活動規模も小さく店舗も持たないため、漁協や地域との連携という意味では他の取り組みより弱い印象を受けた。しかし、遡れば昭和50年代から、利用されていなかったヒジキを収穫から加工、販促まで女性部が一手に請け負い始めたことをきっかけに、今日のヒジキ事業が発展してきたことを考えれば、女性部の功績は非常に大きく、今後漁協やJA等との連携により活動拡大していけば、農林水産大臣賞は十分狙えるのではないかと感じた。

2 日 目：

各分科会の講評がなされ、地域活性化部門（第4分科会）では、評価のポイントとして、グループが地域の中でどのような役割を果たしているか、グループ内、地域内外（漁協や行政など）と連携できているか、の2点が挙げられた。

審査の結果、農林水産大臣賞には愛媛県大浜漁協女性部の「浜の台所 潮里」が選

ばれた。

同漁協はしまなみ海道の通る今治市に位置し、目の前には世界有数の急流海峡「来島海峡」が広がる。高速からのアクセスも非常に良いが、高齢化、後継者不足により漁業は衰退していた。そんな中、平成27年度に地域ぐるみで浜プランの承認を受け、プレジャーボート収容施設などレジャー設備を整備し、取り組みの目玉として女性部が中心となり、港内に加工直販施設「潮里」を整備した。高品質なのにブランド化されていなかった来島鯛に焦点を当て、様々な商品を開発し、店舗でのイトイン、テイクアウト、Aコープへの納品、デイサービスへの出張販売など、地域に親しまれる活動を始めている。今後、しまなみ海道のサイクリングコースに組み込まれる予定もあり、急流体験など既存の観光メニューも拡充し、釣った魚を店で調理して提供するなど、観光集客にも力を入れていきたいということだった。

地域に根付いた活動と将来を見据えた観光誘致、安く扱われていた高級食材の活用など、お手本のような取り組み内容もさる

ことながら、非常に元気に楽しく活動している姿が印象的だった。

本分科会の総括として、①どのグループも地元漁業と結びついた活動で素晴らしかった、②やりたいことは何でもやってみる（沖縄県発表）という姿勢が印象的で、どんな活動でも続けていくことで必ず何か（成果やヒント）を生み出すので、活動を続けていくことが大切である、③退職後の女性の活躍する場所を作りたい（沖縄県発表）という言葉もあったが、退職後の女性を取り込むような活動、楽しくやっていると自然と人が集まってくるということを活動のヒントにして欲しい、とまとめられた。

余談ではあるが、与那原西原町漁協女性部は、前述の大浜漁協女性部とは十分に交流することができ、今後の活動拡大に非常に大きな刺激となったようである。延泊中には、銀座わしたショップの視察、店長と話をした結果、東京進出にも意欲的になってもらったようで、活動規模の拡大に向け、漁協、町とも連携しながら支援を続けていきたいと考えている。



与那原・西原町漁協女性部の発表風景



全国共済水産業協同組合連合会会長賞授賞式



受賞した女性部メンバー



漁協、2町との連携も強固に



銀座わしたショップの視察